

## ベテラン指導者の指導技術を探る －「ダンス」指導時の事例から－

寺山由美・米澤麻佑子・宗宮悠子・大野ゆき

### The Techniques about the Experienced Dance Teacher of Physical Education － A Case Study of Dance class －

TERAYAMA Yumi, YONEZAWA Mayuko,  
SOMIYA Yuko and ONO Yuki

#### Abstract

The purpose of this study was to clarify the techniques of the experienced teacher. It accomplished by asking the “experienced teacher” to observe and give advice on a dance class taught by the “teacher” (= the author) and focusing on the differences in consciousness between the “experienced teacher” and the “teacher”. To explore the techniques in qualitative way, it was analyzed by Episodic Recording Method. As a result, it was explored that the experienced teacher placed the importance on the 3 points below, 1) to interpret learners’ ingenuity clearly, 2) to attempt new challenges continuously, 3) to understand learning content well and make learners to study themselves.

キーワード：ダンス学習、ベテラン指導者、質的研究

**Key words:** Dance Study, experienced teacher, qualitative research

#### はじめに

わが国の学校教育における舞踊教育は、小学校、中・高等学校、それぞれにおいて3つの内容で構成されている。小学校は、「表現」「リズムダンス」「フォークダンス」であり<sup>12)</sup>、中・高等学校は、「創作ダンス」「現代的なリズムのダンス」「フォークダンス」である<sup>13,14)</sup>。

その中でも、「表現」「創作ダンス」は、児童・生徒が創作を行うことを主たる活動としている。1947(昭和22)年、初めて「ダンス」という名称が学校体育指導要綱に用いられた時からこのようなスタイルが確立した。松本は、戦後のこの改革を「学校ダンス(表現)は、“つ

くられた教材を教えるもの”という長い伝統からはなれて、“つくらせるために教えるもの”という新しい方向にむかった<sup>9)</sup>と述べている。舞踊教育は、振付のある動きを「与える」授業から、学習者の創造的な動きを「引き出す」授業へ転換した歴史の変遷がある<sup>22)</sup>。

学習者には、「表したいイメージをとらえ」「動きに変化を付けて即興的に表現する」ことが求められる<sup>13)</sup>。一方、指導者には、学習者のイメージや動きを引き出す指導技術が要求される。その指導技術とは一体どのようなものなのだろうか。

優れた指導者は、本を読んだだけでは得られ

ないような技術を持ち合わせている可能性がある。その技術とは、人と人が直に出会い、今この時を共有することのみ得られるものであり、中村雄二郎が「臨床の知」と名付けた実践や経験でしか捉えられない技術である<sup>15)</sup>。稲垣らは、興味深い事例を紹介している。2人の教員が、国語の授業に先だって長時間納得し合うまで教材を研究し、具体的なところまで一致できるよう話し合いを重ね、同一の指導案でそれぞれ授業を実施した。その結果、2つの授業での学習者の反応は全く違うものになった。片方の教室では授業が停滞し、もう片方の教室では活発な授業が展開されたのである。この事例から、稲垣らは「教材解釈と発問技術を話題の中心にしてきた従来の授業研究の限界を端的に示していた」と述べ、「プログラム（指導案＝発問と指示の展開計画）を開発し検証する研究」だけでは研究の限界があることを指摘している<sup>6)</sup>。

優れた実践や指導者を検討するには、実践や経験でしか得られない、生き生きとした臨床場面を対象に研究する必要がある。これまでの先行研究では、教育学の観点から佐藤らが熟練指導者と未熟練指導者の比較した研究は多数発表している<sup>3,4,18,19)</sup>。また、体育においては、山口が小学校体育における熟練教師の研究を発表している<sup>23)</sup>。いずれも、教師の臨床場面における「実践的知識」<sup>注1)</sup>に着目している。

## 研究の目的

そこで、本研究では、実践や経験でしか得られない、ベテラン指導者の指導技術を探ることを目的とする。ダンス指導を行う「授業者」(＝筆者)の授業に対し、「ベテラン指導者」が参観し助言をもらうことを通して、ベテラン指導者と授業者はどのような意識の違いがあったかを明らかにし、ベテラン指導者の指導技術を考察する。

## 研究方法の選定

本研究では、1) 授業実践を行う、2) 授業前後に行われた「授業者」と「ベテラン指導者」の発話を記録し逐語録を作成する、3) 逐語録からエピソード記述法によって考察を行う、という手順で進める。

エピソード記述法とは、保育、教育、看護、介護の分野で用いられており、現場における「人の生の実相」を対象にするための質的アプローチを目指す方法である。実践場面のエピソードに焦点を当てることで、現場で起こっていることの「意味」を明確にする特徴がある<sup>8)</sup>。

稲垣らは、これまでの授業研究では「教育技術」や「プログラム」の開発に重点がおかれ、教師の思惑や計画に修正と反省を迫るような「出来事」をないがしろにしてきたことを指摘している<sup>6)</sup>。本研究では、「授業者」と「ベテラン指導者」に起こったエピソード(出来事)は、両者の違いであると同時に、ベテラン指導者の指導技術が現れる場面であると考えたため、このような研究方法を選定した。

## 研究方法

以下の手順で研究を進めた。

### 1) 授業実践

- ①「授業者」が授業指導案を作成し、「ベテラン指導者」から修正点について意見をもらう。
- ②授業実践を「ベテラン指導者」ならびに共同研究者に参観してもらう。
- ③授業後、「授業者」および参観者全員で討議会を行う。
- ④「授業者」が次回の指導案を作成する。①の作業に戻る。

### 2) 対象とした授業

対象授業：筑波大学体育専門学群 実技理論・実習 A 群 ダンス (2年生対象)

受講生：男子 40名、女子 22名、計 62名  
対象授業期間：2010年10/8、10/15、10/29、11/5、11/12、金曜日2限(全5回)

記録方法：授業および授業後の討議会は、2台のビデオカメラで撮影された。1台は指導者を中心に、もう1台は学習者を中心に撮影された。(授業後の討議会では、時間の都合でビデオを見ながらの討議はできなかった。)

### 3) 考察方法

授業後の討議会において話された逐語録をもとに、エピソードを抽出し、鯨岡<sup>8)</sup>を参考に、〈背景〉、〈ベテラン指導者の発言〉、〈考

察>により考察した。

## 研究対象の選定

本研究では、熟練指導者ではなくベテラン(veteran)指導者を対象とした。ベテラン指導者とは、熟練指導者ほど何人も存在しない第一人者という意味で使用している。

本研究で対象としたベテラン指導者とは、元東京教育大学附属小学校教諭・元十文字学園女子短期大学教授である相場了(のり)氏である<sup>註2)</sup>。相場氏は、表現運動の指導技術の高さに定評があり、現在80歳であるが、毎月、勉強会を開催し学び続けている。相場氏の著書および公開研究会での助言等から判断して、本研究で定義するベテラン指導者の条件を満たしていると考えた。

次に、授業者を他者ではなく筆者自身にした理由は、本研究で扱う指導技術や知見が、繰り返し述べるように、実践や経験から得られる「臨床の知」の類であることから他者を介することに限界があると考えたからである。

## 結果と考察

### 1) 5回の授業の概要

まず、5回の授業指導案は、授業者が作成したものに対して、ベテラン指導者が電話とFAXで意見を述べ、再び授業者が修正する作業を繰り返した。その結果、「本時の課題」は、表1のように修正された。

授業実践開始以前、ベテラン指導者は、この5回の授業で学習者にどうなって欲しいのかもっと具体的に絞るように授業者に求めた。ま

た、ベテラン指導者は、グループでの活動が重要であることを主張した。学校で学習する意義は友人の存在であり、友人と学び合うことがとても大事なことでであると説明した。それを受けて、全体のめあてを「グループによる身体表現にチャレンジしよう！－表現性のある身体活動を目指して－」と修正した。

### 2) 第1回の授業でのエピソード

#### <背景>

授業者は、第1回目の授業で学習者である学生たちと初めて出会った。特に、男子学生の多くは、この授業以前にダンスを習った経験がない。授業者は本時の課題を「リズムに乗って踊ること、他者とかがわかること」とし、ダンス学習の導入として学習者が律動して踊りながら他者と交流することをねらいとする指導案をベテラン指導者に見せた。その後、ベテラン指導者から電話とFAXでの修正提案を受けて、本時の課題を「友だちとダンス、はじめての出会い(リズムに乗って踊ってみよう、他者とかがわってみよう)」に変更した。この時点でベテラン指導者は、授業者の授業実践を見たことがなかったので、授業の展開については授業者の原案のままで行われた。

授業では、ペア・ダンスを行った。ペア・ダンスは、授業者が2人組で行う短い定型のある動きを教え、学習者はその動きをくり返しながらかつて相手を変えていくものである。ダンス未学習者はダンスへの抵抗感が強い場合が多い。授業者の経験上、ペア・ダンスはそれを払拭できる成功率の高い教材だったために実施を採択し

表1 本時の課題

		修正前	修正後
全体のめあて		表現性のある即興表現ができる	グループによる身体表現にチャレンジしよう！ －表現性のある身体活動を目指して－
第1回	10/8	リズムに乗って踊ること、他者とかがわかること	友だちとダンス、はじめての出会い (リズムに乗って踊ってみよう、他者とかがわってみよう)
第2回	10/15	からだを精一杯動かすこと	からだとの出会い(からだを精一杯動かそう)
第3回	10/29	動きの様々な質感を捉えること	動きとの出会い(動きの様々な質感を捉えよう)
第4回	11/5	即興表現にチャレンジすること(グループ作品にトライ)	グループとの出会い
第5回	11/12	まとめ	仕上げと発表

た。授業者のねらい通りペア・ダンスで学習者は歓声を上げながら踊り、大いに盛り上がった。

その中でA君が、授業者が与えた振りとは違う動きをしていたのが目についた。授業者は、A君がふざけていると思い、「ダイナミックで良いけど、ほとんど走っているね」と冗談交じりで諫めた。

#### <ベテラン指導者の発言>

授業者は授業後、思いもしない発言をベテラン指導者から聞く。ふざけていたと思っていたA君に対して次のような言葉でベテラン指導者は勉強させてもらったと述べる。

ベテラン指導者：「A君の動きで私は勉強させて頂きました。それはなぜかっていうと表現って言うのは自分の思いを動きで表現することが一番、身体の動きで表現することは一番大事なことなのね。あの、このペンで託して表現する、絵とかね。それから文章に置き換えて自分の気持ちを表現する。みんな自分の表現は違うわよね。からだで表現することは、からだそのものが、お料理でいうと食材なのね（略）だから生き方が、一人ひとりの今の、皆さんの生き方が物を言うわけです。結局最後は、だから私は80近くになって、今は何をしたいかなっていう、その気持ちを動きに置き換えるっていうのがとても大事なことだと思っているので、それぞれのしっかりした思いを持つこと、生活そのものが表現につながるんだということね、しっかり捕まえて欲しいと思うの。今はどっちかっていうとチャラチャラって調子に乗ることは大事なことだけど、表現っていうものはそういうものではないんじゃないでしょうかって皆さんに言いたいのです。A君の動きをみると、調子よくずれるときがあるわけ。だけでも勝手に自分なりにイメージしているわけ。ここだ！と思いました。」

「教師はずーっと回って見なくちゃ。（授業者は）それが出来てないと私は思いました。私はちょうどたまたまA君が近くに居た。なるほどこの人ちょっとリズムに乗ってないかと初めは思ったんだけど、段々乗ってきてね、自分で創意するのが楽しそうな感じがしたの。そういう事に教師は気がつかなくてはいけない。それだけ。そこに着目すればね、今日はねまた違った方向にね、作る方向へ、それぞれ作る方向へいくと思うのよ。あれだけの学

生だったら。男の学生の方がねそういう点ではね、殻から破れるんですよ。先生の下さった課題から破るのはね、男の子の方がいいですよ。小学生も中学生も。それに気づく事。上に立つ人は。」

#### <考察>

同じ現象を見て、授業者とベテラン指導者は全く真逆のことを捉えていた典型のようなエピソードであった。授業者は、A君の創意が指導者である授業者をすでに越えていたことに気づかなかつたのである。授業者は、知らないうちに学習者を自分の手中に入れようとしていた。本時の授業内容を完遂するために、A君が授業者の提示した課題から外れることを避けようとした。実際、後に記録ビデオで確認すると、A君は授業者から提示された動きを発展させていたのである。授業者は、それに気がつかなくつたことを第2回目の授業の始めに皆の前で謝った。彼の創意は、その後の授業においても際立っていた。

ベテラン指導者は、このペア・ダンスからグループ創作へ展開できる可能性についても示唆した。授業者には、学習の導入として考案したペア・ダンスがグループ創作課題になるという発想は全く浮かばず、ベテラン指導者の学習課題提示の発想に衝撃を受けた。授業者は、ペア・ダンスを創作課題のために考案したのではない。しかしながら、ある課題が違う学びに発展できるという臨機応変な思考は授業者に不足していた。

その後の指導案作成においても、ベテラン指導者には何度となくこのような授業者が見たことも考えたこともない学習課題の提案があった。例えば、後述する新聞紙の教材は、新聞紙の動きを学習者がまねるのが普通であり、ダンス指導の場面では頻繁に行われる。しかし、ベテラン指導者は、新聞紙に何が書いてあるかをグループで即興するという課題を提案した。このような発想は初めて聞いたことであり、「目から鱗」の驚きであった。波多野は、戦後の優れた国語教諭であった芦田恵之助の例を引いて、教師の創造性について言及している。芦田の授業を20年ぶりに参観した波多野は、授業そのものは「芦田教式」という型そのままであったが教師が進歩していたことを例にあげてい

る。「教師の授業の創造性は、(教える)型だけにあるのではないことがわかる。型は昔とまったく同じでもよい。その型をとおして訴えかける教師の肉体が創造性をもっているかどうか、たいせつな点であるようにおもわれる」<sup>5)</sup>。ベテラン指導者の視点と共通するものである。例えば、ジャガイモの料理をする時に、肉じゃががしか思いつかない人と、様々なジャガイモを用いた料理が思いつく人とは、その創造力に違いがある。これは、毎日の料理場面でのどのように行為を意識するかの積み重ねである。同様に、指導者がある課題や教材をどのように多様に創造できるかという能力は、指導者が毎日の指導場面をどのように意識するかの積み重ねである。指導者が、波多野のいう「教師の肉体が創造性をもっている」と言わしめるような毎日を過ごしているかにかかっている。

ベテラン指導者は、「生活そのものが表現になる」ということを何度も述べた<sup>注3)</sup>。それは、その人が毎日どのような身体であるかということになる。滝沢は、リシールの言葉を引きながら、普通の経験における「身体の厚みの痕跡」を取り上げている。「この身体の厚みの痕跡とは、世界との関わりを具現化させている [からだ] による体験なのである。それはその人の立ち居振舞いにも現れる」<sup>21)</sup>。波多野のいう「教師の肉体が創造性をもっている」こと、ベテラン指導者がいう「生活そのものが表現になる」こと、どちらも毎日の体験をどのように身体に刻み込むかを問うている。教師の創造性とは、舞踊教育において学習者に身につけたい創造性と同義であるとも考えられるのである。

### 3) 第2回の授業でのエピソード

#### <背景>

第2回目の指導案は、1週間で5回書き直しとなった。第2回目の授業も、授業者の得意とする内容で構成していた<sup>注4)</sup>。しかし、授業者の授業を前回参観したベテラン指導者は、それらの内容を全部捨てて、授業者が一度も挑戦していない方法、すわなち、ある運動課題を提示して、それをもとに創作するという内容で授業を進めるように電話で提案した。ベテラン指導者が提案した内容は、学習者が集中して真剣に授業に取り組まないと崩壊するようなもので

あった。授業者は、本学に就任してからの経験をもとに、対象である学生たちはそのようなことはできないと電話で話した。しかし、ベテラン指導者は「彼らは絶対にできる」と譲らない。何度も押問答が続き、授業者は、前任校の熱心な学生と比して本学の学生の授業態度が違っていたことを思い出し、ベテラン指導者は本学の学生のことが理解できないのかもしれないと疑い始めた。いくら言葉をかえて説明しても、ベテラン指導者は「なぜ学生を信じないのか」「先生が挑戦しなかったら何を教えるのか」「学生さんにこういうことをするのは貴方達も初めてだけれど私も初めてだと言いなさい」等、会話は平行線を辿った。最後は、授業者が根負けする形で指導案が定まった。

授業当日、授業者は、ベテラン指導者の助言通り、授業開始時に学習者に向かい「みんなも初めてだけど私も初めてやります」と公言した。授業者の予想は大きく外れ、学習者はよく集中し活発に動いた。

#### <ベテラン指導者の発言>

授業者：「自分が得意とするというか今まで成功体験がある指導は全く封印して、今回1回もやったことのないのに挑戦してみました。先生(ベテラン指導者)には不安ですと、彼らが動けなくなったり、戸惑ったり、精一杯やらないのではないのでしょうかと何度も何度も発言してしまっただけです。なぜ、学生さんを信じないのだ、と。彼らはやりますよ、と一点張りっていったら変ですけど、じゃあそうなのかなと。(略)今までの学生さんとのやりとりの中でこういう事は、バカにしてやらないだろうとか、こういう風にしたら、みんな遠のいて行くかなっていう、そんなにイメージがわからないだろうって思い込みみたいなものがあつたのですが、今日はユニゾンより(創作課題の方が)彼らが踊りだす事に、自分が驚いてしまって、もっとそういう可能性ってことを信じていけないといけななんだと、改めて心に刻んでいます。」

ベテラン指導者：「よかったよね。殻が破けて。破れるって、自分が思い切ってやらなかったらね、壁はぶち破れないよ。いつも自分はいい子になってさ、やれるって思ってその通りにやっていたら、自分が開けていかない。開かない。

いつも同じような調子になるでしょ。自分も新しいことに挑戦してみなきゃ。ダメなら捨ててらいいのよ。なんでもそうですよ。(略) そういう全部捨てちゃうってことは大変なことですよ。習慣を変えるということは。それと、同じこと。自分はもう、これはできないのではないかと不安で不安でしょうがない。なんでやらないで不安で不安で言うの？やってみてダメなら捨てて、いいところを大事にして、もう一つの課題の別な方向へ連れて行けばいいんじゃないの？やらないで、どんなこんなになるのは、おかしいよね。やってみることよ。それが体育の世界の一番いい所でしょ。と、私は思う。よかったねー、今日は。」「だからね、悩んでいいわけ。悩んでもね、思い切ってやること。やらないでね、えらいこと言ったって誰も信じてくれない。やってね、学生や生徒が変わった時にはこっちも嬉しいし、向こうだって嬉しいの。力いっぱい自分出したとき。そうでしょ？そうなるようにやって下さい。」

#### <考察>

授業者は、自らのこれまでの経験の中で成功した指導方法を蓄積し、安定した授業展開を行うようになっていた。いつのまにか新任時からの失敗経験を繰り返したくないあまり、指導方法も定番のものをなぞり、創意のないものになっていた。ベテラン指導者は、指導者自身が新しいことに挑戦することに大きな意味があることを述べている。ベテラン指導者は、授業のたびに学習者も変わっていくが、指導者もまた同様に変わっていくことを求めた。本論では取り上げないエピソードの中には、ベテラン指導者自身も挑戦する場面もあった。ベテラン指導者は、授業者にだけでなく、自らもまた新しいことに挑戦していた。

学びとは、学習者が学び、指導者が学ぶという、学びの二重構造になっていることがわかった。中田はハイデッガーの言葉を踏まえて、「知識を得る方法だけでなく、知識の源泉である自分が生きている世界を変えることに教育の本質がある」「すでに或る体験をした者がそれを体験していない者にそれを体験させることが教育なのではないこと、むしろ子どもたちとともに教師も新たに何かを体験し、それまでとは異なる世界へとともに移行することが教育の本質で

ある」<sup>16)</sup>と述べている。授業者が、自らの殻を破きながら、学習者と共に学ぶことを理屈抜きに示したエピソードであった。

#### 4) 第4回の授業でのエピソード

##### <背景>

いよいよ、授業も折り返し、第4回はグループ創作を行うようになっていた。これまでの授業は、ずっと授業者の指導をベテラン指導者に参観してもらった形だった。折角の機会なので、第4回ではベテラン指導者に直接学生を指導してもらった時間を少しだけ設けた。まず、授業者が新聞紙を用いた課題を行い、次にベテラン指導者が「雪が降る」という課題で活動を展開する予定であった。

授業当日、授業者は、ベテラン指導者と何度も相談して決定した新聞紙を用いたひと流れの課題を行った<sup>注5)</sup>。最後に新聞紙をちぎって空中に舞い上げると、学生たちは「ワ～」と言いながら軽く跳んだ。そして、ベテラン指導者にバトンタッチしたところ、突然、学生に向かって「先生(授業者)はそんな風に新聞紙を動かしていた？新聞紙ちぎって、新聞紙は一度空中にワァッと広がって、上から落ちて来たじゃない！ちゃんと、ものを見ないとダメ！私がもう一度やってみるよ」と、新聞紙を持って「授業者」と同じ課題を咄嗟に始めた。学生たちは、ダイナミックに動きだし、新聞紙が空中に舞い上がる所で思いつき跳び上がった。

##### <ベテラン指導者の発言>

授業者：「先生(ベテラン指導者)の、生のご指導を拝見したかったので、無理いってお願いしてやって頂いて、やはり…うーん…。やっぱりそうなんだと、こう…まざまざと、あの、体でわかりました。自分も同じこと(指導を)やったので、この(学生に対しての)浸透の無さというか、身にしみてわかって、私が一番勉強に今日はなりました。」

相場：「踊りってさ足偏でしょ？足を使わないとダメね。新聞紙をちぎって、ばあっと先生があげたでしょ？上げた時にね、足が上がってないじゃないの。足っていうのは、踊りは足偏だから、足を使わなきゃダメ。リズムを取るのも、これでリズムを取ることも出来るけど、足って原動力よね。だからリズムを刻むのも足だし、

色んな足の使い方をするっていうのも、感じのある動きを見つるっていうことも大事なことなんじゃないかなと。(略) パッと見た瞬間新聞紙を捕まえるってことは、大事な事ね。正直にそれを見るというね、あの、見方、というか、正直にまずは見なくちゃね。(略) そういう風にやりながらね、ちょっとずつパッといい所をね、誉めてあげるっていうこと大事なことのね。ここは、早い！早くやるのね！って。あんまりね、ダラダラとベチャベチャとしゃべらない方がいい。それ、先生（授業者）、もうちょっと気をつけて指導したらいいと思う。言葉をね、吟味することね。短い言葉で、『うん、いいね。こうだから』っていう言い方があると、心の中にグーッと、入り込むことがあるんじゃないかなと思う。」

#### <考察>

岩田は、「新聞紙」の授業について、『「他者が操作する新聞紙の動きをまねて自らが動く」という学習形式（教材）は、『感じて動く』（教科内容）ことを担いけると同時に、『感じて動く』ことを焦点化させ、クローズアップすることができる』ことを明らかにしている<sup>7)</sup>。授業者は、新聞紙の教材において、正確に動きを捉えて身体で模倣・実現するという学習内容があることを知っていたものの、学習者に体現させ切ることができなかった。ベテラン指導者は、言葉かけの間合い、短い言葉の使用、そして、学習者が真剣に取り組まざるを得ないような空間（空気）を作り出したことにより、学習者の動きを変えることができた。中田は、「或る教材がどのような理論構造をもっているかは、その教材を理解した者によってはじめて発見される」<sup>16)</sup>と述べている。このエピソードは、授業者や参観していた舞踊専門の大学院生が、改めて「新聞紙」という教材を捉え直す機会となった。

「ものをよく見る」「正直に見る」ということは、ダンス学習のみならず、学びには欠かせない。ベテラン指導者は、ダンス学習に限らず、常に指導者は学習者の学びをどう導くべきか問題にしている。第2回での討論会の時に、ベテラン指導者は、指導者が上手に課題を提示することができれば、学習者は自分が思う方に伸びることができる。それが先生の構えであり、学習の轍を作ることが大切であると述べた。「指

導とは、教師がそういう轍を作ってあげて（学習者を）自由な姿にならせてあげるのが、指導なのよね。」轍は道ではない。指導者は、学習者をレールに乗せて引っ張るのではなく、学習者が創意を持って自ら求める解を見つけられるような学び方を学ばせることが大切なのである。

#### まとめ

本研究は、ベテラン指導者の指導技術を探るべく、実践授業における「授業者」と「ベテラン指導者」の意識に不一致があった3つのエピソードを取り上げて考察した。結果として、以下の3つがベテラン指導者の指導技術として浮かび上がった。①指導者は学習者の実態と創意を明確に捉えること、②指導者が絶えず新しい挑戦を試みること、③教材の学習内容をよく理解し学習者が自ら学べるようにすること、である。これは、舞踊教育の指導技術というよりも、教育の指導技術といえるべき項目であろう。これまでも「授業者」は、指導者の心構えとして目の前の学習者をよく見ること、すなわち「実態を捉える」ことが大事であることは理解していた。しかし、「授業者」と「ベテラン指導者」は同じ学習者の動きを見ながらも、互いに見えるものは違っている。すなわち、同じものを眼球で捉えながらも、学習者個々の反応を察知する見方には大きな違いがあった。ここに、ベテランの指導技術がある。学習者個人、学習者集団、学習者の雰囲気等、その場を即座に判断する即興性が必要なのである。<sup>注6)</sup>

教員の指導技術を考える時、「こういう場合はこうすればよい」というマニュアルのように提示できるものもあれば、明日の授業に生かせるといった即時的なものではないこともあることを、ベテラン指導者から読み取ることができた。では、どのようにしたら創意と即興性のある指導技術を得ることができるのだろうか。波多野は、先述した芦田恵之助を例に以下のように説明している。芦田は、何百回も目を通した教材でも、授業を行う朝には必ず通読していた習慣があった。「創造する人は、いつも変化を望む人であるが、その人は、かならずしも、古いことに退屈している人ではない。退屈している人には、創造の神は訪れないものである。そ

うではなく、なんべんもくりかえしたものを、もう一回、新しい角度から見なおすところに創造が生まれる。これを心理学では『飽和』といっている。飽和より創造が生まれることはずいぶん多い。」<sup>5)</sup> ベテラン指導者が現役の時には、学習者のいない空間や真夜中の自宅で何度も授業でいうべき言葉かけや発問を練習して、子どもたちの前に立ったそうである。現役を退職してもなお毎月の勉強会を欠かしていない。このような姿勢に学ぶべきことは大きい。

## 謝 辞

本研究は、平成 22 年度筑波大学体育科学系学内プロジェクト「ダンス学習における指導技術向上の要因を探る～ベテラン指導者からの学びを通して～」(研究代表者 寺山由美)の支援を受けて行った研究です。また、5 回の授業を実践するために、相場宏先生(元日本女子体育大学教授)、野村良和先生・村田芳子先生・朝岡正雄先生・渡辺良夫先生・金谷麻理子先生・斎藤卓先生(筑波大学体育系)、石川義彦先生(元茗溪学園校長)・石川ひろ子先生(元茗溪学園教諭)にお世話になりました。この場をお借りして深くお礼申し上げます。最後に、相場先生に心よりお礼申し上げます。

## 注

- 1) 佐藤は教師の「実践的知識」と「実践的思考知識」を区別して考えている。「実践的知識」は教師の経験的な知識で厳密性や普遍性には乏しいが、生き生きとした機能的で柔軟な知識である。その「実践的知識」を活用して、教室で起こる複雑な事象の問題を発見し解決していく思考の様式を「実践的思考様式」としている。<sup>13)</sup>
- 2) 相場先生：1931 年生まれ。東京教育大学 1 期生であり、松本千代栄先生の理論を東京教育大学附属小学校にて実現した教諭である。十文字学園女子大学名誉教授。元日本女子体育連盟副理事長、現在日本女子体育連盟参与。
- 3) 滝沢は、「しぐさ」をキーワードに教科体育が担うべき身体文化を検討している。「しぐさ」は他者とのコミュニケーションにおいて無意識に表れるものであり、身体その

ものがそれまでにどのような経験をしてきているかの蓄積であることを言及している。その意味で、「他者とやり取りできる身体が必要となる。それがしぐさを生じさせる。それは他者の視点に立つということでもあるし、自己中心性を脱して間主観性の視点を持つことでもある」と述べる<sup>20)</sup>。指導者個々人の持つ身体に大きく関与するのは、それぞれの身体がどのような知識を知っているかではなく、どのような生活を送ってきたかが重要となるためである。

- 4) 「授業者」が最初に計画していた案とは、学習者の創造性をあまり必要としない、鬼ごっこを改良した教材だった。
- 5) 新聞紙の課題は、「グループで 1 枚の新聞紙になーれ」「ピーン・クシャ・ピーン・クシャ・伸ばす・ねじる・丸める・ゴロゴロ・ゴロゴロ・ちぎる・自分たちで次はどうする？」であった。
- 6) 稲垣らは、創造的な熟練教師は「即興的思考」「状況的思考」「多元的思考」「文脈化された思考」「思考の再構成」という 5 つの特徴で示される「実践的思考様式」を持ち合わせていることを明らかにしている<sup>6)</sup>。

## 引用参考文献

- 1) 相場 了(2010):今を生きる子どもたち 小学校表現運動の学習指導. アイオーエム、東京
- 2) 相場 了、寺山由美(2010):インタビュー-子どもが教えてくれる柔軟なゴール-。女子体育 52 (4): 6-9
- 3) 秋田喜代美、佐藤 学、岩川直樹(1991):教師の授業に関する実践的知識の成長 - 熟練教師と初任教師の比較検討 -。発達心理学研究 2 (2): 88-98
- 4) 秋田喜代美(1992):教師の知識と思考に関する研究動向。東京大学教育学部紀要 32: 221-232
- 5) 波多野完治(1990):学ぶ心理・教える心理。小学館、東京
- 6) 稲垣忠彦、佐藤 学(1996):授業研究入門。岩波書店、東京
- 7) 岩田 靖、江藤由佳(1999):表現運動・

- ダンス領域における「新聞紙」の授業に関する一試論－「導入の課題」としての教科内容論的解釈－. 長野体育学研究 10 : 33-42
- 8) 鯨岡 俊 (2005) : エピソード記述入門. 東京大学出版会、東京
- 9) 松本千代栄 (1965) : 現行の学校ダンスはこれでよいのか (一)－創作の問題を主として－. 日本体育者. 学校体育 18 (11) : 40-45
- 10) 丸山範高 (2009a) : 現職国語科教師が理想とする、経験知としての授業実践知の特質に関する事例研究. 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要 19 : 63-69
- 11) 丸山範高 (2009b) : 国語科教師が持つ授業実践知の習熟過程に関する事例研究. 和歌山大学教育学部紀要人文科学 59 : 1-9
- 12) 文部科学省 (2008a) : 小学校学習指導要領解説 体育編. 東洋館出版社、東京
- 13) 文部科学省 (2008b) : 中学校学習指導要領解説 保健体育編. 東山書房、京都
- 14) 文部科学省 (2010) : 高等学校学習指導要領解説 保健体育編・体育編. 東山書房、京都
- 15) 中村雄二郎 (1992) : 臨床の知とは何か. 岩波書店、東京
- 16) 中田基昭 (1996) : 教育の現象学 授業を育む子どもたち. 川島書店、東京
- 17) 岡花祈一郎、杉村伸一郎、財満由美子、松本信吾、林よし恵、上松由美子、落合さゆり、山元隆春 (2009) : 「エピソード記述」による保育実践の省察－保育の質を高めるための実践記録と保育カンファレンスの検討－. 広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要 37 : 229-237
- 18) 佐藤 学、岩川直樹、秋田喜代美 (1990) : 教師の実践的思考様式に関する研究 (1) : 熟練教師と初任教師のモニタリングの比較を中心に. 東京大学教育学部紀要 30 : 177-198
- 19) 佐藤 学、秋田喜代美、岩川直樹、吉村敏之 (1992) : 教師の実践的思考様式に関する研究 (2) 思考過程の質的検討を中心に. 東京大学教育学部紀要 31 : 183-200
- 20) 滝沢文雄 (2002) : 教科体育が担うべき身体文化の検討－しぐさを中心に－. 体育・スポーツ哲学研究 24 (2) : 17-25
- 21) 滝沢文雄 (2004) : 現象学的観点からの「心身一体観」再考：「身体観」教育の必要性. 体育学研究 49 (2) : 147-158
- 22) 寺山由美 (2010) : 創作を主とする舞踊教育の生成過程－「与える」から「引き出す」授業への萌芽－. 舞踊教育学研究 12 : 5-18
- 23) 山口孝治 (2009) : 小学校体育授業における教師の実践的知識の検討：熟練教師にみる授業設計段階の調査結果を例に. 教育学部論集 20 : 33-41